

設楽発掘通信

No.67
令和3年
11月号

大崎遺跡地元説明会を開きます

今年度の設楽ダム関連調査も、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡、そして下延坂遺跡が終了して、残るは田口の大崎遺跡の調査のみとなっています。その大崎遺跡の調査も、現在までのところ着実に進んでおり、本誌三頁にありますようなさまざまな調査成果がそろいつつあります。

この度、十二月十九日の日曜日に、大崎遺跡の地元説明会を開催することとなりました。鎌倉時代頃の水田跡をはじめ、縄文時代・弥生時代の遺構・遺物がまとまって見つかっています。特に水田跡は、山間部における水田耕作の様子を知る上で、貴重な事例となりそうです。

開催に際しては、引き続き新型コロナウイルス感染拡大防止には留意して参ります。是非、ご来跡下さい。

(川添和暁)

大崎遺跡地元説明会のご案内

日時：令和3年12月19日（日） 午前11時～

場所：大崎遺跡現地



※現地で見つかった遺構と遺物について、調査員が解説をします。

※履き慣れた靴でご来跡下さい。

※現地で説明会資料を配付します。

※お車で越しの方は、「川向公会堂前」バス停からお越し下さい。

※雨天の場合は中止とします。

問い合わせ先：080-1571-4989(川添)

下延坂遺跡発掘調査

8月から4ヶ月に渡って調査を行ってきた下延坂遺跡B区の竪穴建物跡ですが、先日ついに調査が完了しました。

初めは大量の礫が配置された集石遺構のみが見つかっており、特殊な建物跡にも見えましたが、掘り下げを進めると、4本柱と中央の石囲炉を持つ住居であると判明しました。時期は縄文時代中期後半（約五千年前）と思われる。

この住居の特徴としては、廃絶（＝建物の利用の停止）に伴う儀礼の痕跡と思われるものが多く見つかったことが挙げられます。まず、①石囲炉を構成する炉石は、人為的に壊され、炉の中に転落しています。つぎに、建物の床面近くからは炭化した木材が複数見つっていますが、建物全体に焼けた跡などはありません。これは、②どこかで焼いた木材を住居内に持ち込んだことを示しています。もしかすると、住居に使っていた建材かもしれません。さらに、建物がある程度埋まった後、③そこに穴を掘り、焼けた土や炭化物の混ざった土で埋め直しています。そして、④最大の特徴である集石遺構が作られます。集石遺構には土器などが含まれますが、建物の床面付近では遺物がほとんど見られないことも注目されます。ここから、⑤廃絶に際して日用の土器類などが持ち出されている可能性があります。

この住居は保存状態がよく、調査には時間もかかりましたが、縄文時代中期の文化を考える上で様々な材料を与えてくれるものとなりました。（河嶋優輝）



写真1 竪穴建物跡調査前



写真2 床面遺構調査後

下延坂遺跡C区ですが、11月上旬に全ての調査を完了しました。調査の成果としては、まず南端で確認した3棟の重複する竪穴建物跡があります。これらの調査を進めたところ、縄文時代中期後半のものと思われる土器片や石器が出土しました。炉は残存しておらず、竪穴建物内に穴がいくつか確認されましたが、柱穴といえるものは確認できませんでした。続いて竪穴建物跡が確認された層位より下層の調査について述べます。ここでは、複数の土坑が確認されましたが、竪穴建物跡や炉穴といった遺構は確認できませんでした。遺物は縄文時代中期後半（約八千年前）の土器片や多数の石器が出土しました。

今年度の下延坂遺跡の調査はこれで終了ですが、来年度も調査を予定しておりますので引き続きよろしくお願いいたします。（渡邊 峻）



写真3 C区全景



写真4 竪穴建物跡完掘状況



大崎遺跡発掘調査

大崎遺跡は、A区の続きと新たにB区の調査を開始しました。

A区では水田跡を掘り始めており、現在8割ほど調査が進んでいます。出土遺物には縄文時代中期から鎌倉時代までの各時期の土器片や石器があります。特に水田跡周辺の土坑には鎌倉時代（約七百年前）の伊勢型鍋が埋められていました。A区の南半部では縄文時代後期末から晩期（約三千二百年前）のものと考えられる土坑墓が3基見つかったり、現在調査を進めています。

A区の南端で下層の確認を行なったところ、縄文時代早期の煙道付炉穴を確認しました。現在調査中ですが、何度か作り直されているのではないかと考えています。

B区では調査区の北側から表土掘削を開始しました。遺物は縄文時代と思われる土器片や剥片が出土しています。A区では水田跡が見つかりましたが、B区ではどのような成果が見つかるのか楽しみです。（社本有弥）

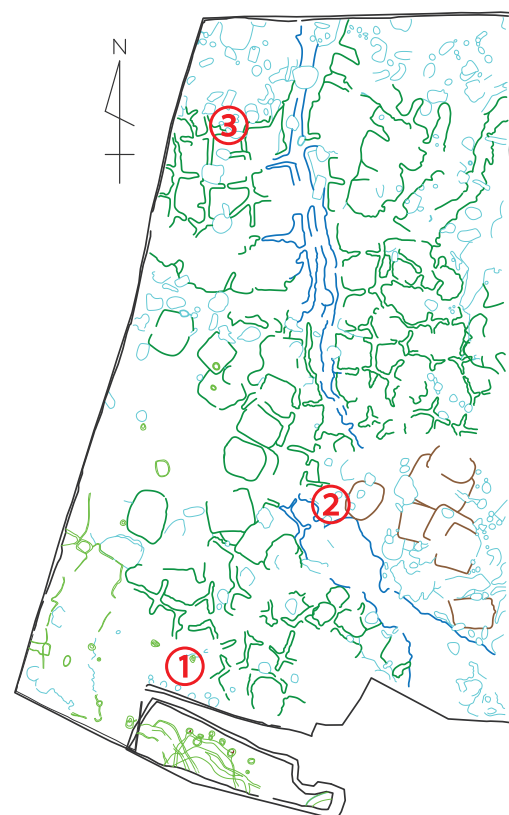
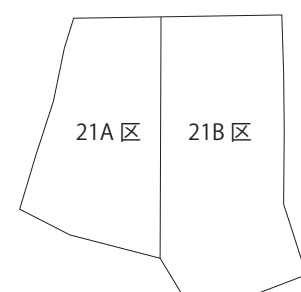


図1 大崎遺跡 21A区全体図 (1/1000)

（緑線：水田、青線：水路、茶線：竪穴建物跡）



写真7 伊勢型鍋出土状況 (図1②)



写真5 水田跡遠景



写真8 注口土器片出土状況 (図1③)

（縄文時代後期中葉：三千八百年前）



写真6 煙道付炉穴検出状況 (図1①)

設楽の江戸時代集落と変わった掘立柱建物 ほったてばしらたてもの

発掘調査で見つかる建物跡は、一般的に、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、礎石建物跡などに分類されます。近年の設楽地域での発掘調査では、縄文時代や弥生時代といった古い時代の竪穴建物跡の成果が目立ち、昨年度の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査で見つかった、周堤を持つ弥生時代の竪穴建物跡などは記憶に新しいかと思えます。

一方、竪穴建物と同様に縄文時代に現れた掘立柱建物は、穴を掘って柱を立てる単純な構造で、礎石建物のように複雑な木組みの技術が必要ないこともあり、江戸時代までの長い間、人々の住居や倉庫などに利用されてきました。しかし、設楽での発掘調査では、笹平遺跡などで少数が確認されただけでした。

そんな中、一昨年の万瀬 まんぜ 遺跡の調査や、昨年の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査ではまとまった数の掘立柱建物跡が発見され、江戸時代の集落の様子がわかるようになってきました。

図2と図3は、万瀬遺跡の掘立柱の集中地区で、赤色の範囲が掘立柱建物跡、青色の線が柵列跡 さくれつ を示します。重複するものを含めて9棟が見つかっており、特に図2の場所は、建物の数や密度から、集落の中心地と思われるます。

一方、図4は上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の江戸時代の掘立柱建物群です。数は万

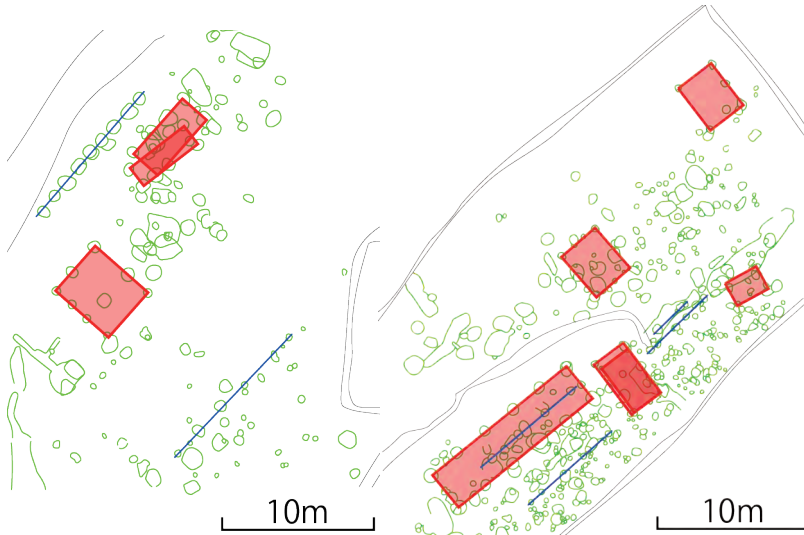


図3 万瀬遺跡の掘立柱建物跡群(2) 図2 万瀬遺跡の掘立柱建物跡群(1)

瀬遺跡に及びませんでした。建物の規模の面では万瀬遺跡の例に負けていません。また、こちらでは変わった建物跡が見つかっています。写真9は図3右側の大きな建物の空撮写真ですが、柱を立てた穴の中に、白い物が見えます。これは上面が平らな礫で、柱の基礎として据えられたものと考えられます。こうした掘立柱建物跡は中世から存在しており、愛知県下では江戸時代の掘立柱建物跡の1割ほどにこのような礫が見られます。しかし、通常の掘立柱建物が周りの中、なぜこの建物だけ基礎が必要だったのか、またこのような建物がある中、なぜこの建物だけ基礎が必要だったのか、またこのような建物がある中、なぜこの建物だけ基礎が必要だったのか、またこのような建物がある中、なぜこの建物だけ基礎が必要だったのか、など疑問は多く残されており、それらの謎が今後明らかにされることが期待されています。(河嶋優輝)

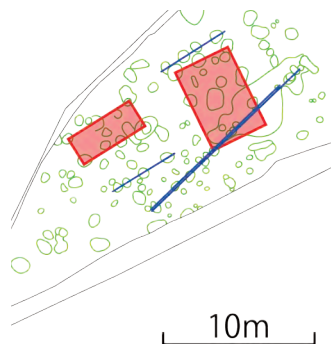


図4 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の掘立柱建物跡群



写真9 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の変わった掘立柱建物跡 (矢印の先が礫)

設楽発掘通信

No.67 令和3年11月号

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0001 愛知県富田市中ケ須野方802の24
電話 (0567) 67-4161【管理課】4163【調査課】

ホームページ <http://www.maibun.com>

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaichi>

Twitter https://twitter.com/aichi_maibun

印刷・協力 株式会社イビソク

